

切符の向こうに見る夢 ～花を水で潤すように～

切符を買っている。乗るわけでもない切符を。枚数は2014年9月時点で2,819枚になる。動機は3年半前の震災と只見線を襲った新潟・福島豪雨。被災した鉄道を応援したい、少しでも復旧の役に立ちたい、そんな気持ちからだ。切符を手にするお客さんの反応は様々。その路線が故郷で特に思い入れがある人、私の取り組みに共感してくれる人、いずれの場合も、鉄道に対する眼差しは、みんなとてもやさしい。

思えば、鉄道廃止への反対運動はよく聞くが、「鉄道廃止を求める運動」というのは聞いたことがない。ローカル線がたびたび廃止の危機に直面するのは、利用者の激減等による経営状況の悪化や、自然災害など、やむにやまれぬ事情による。

桜吹雪が舞う木造駅舎、次の列車まで、文庫本の頁を繰るひととき。海沿いに行く気動車の窓を開け、車内に波音と潮の香りを浴びる瞬間。売店で買った地酒をボックス席でチビチビやりながら、お国訛りをBGMに眺める雪景色。そうした瞬間を積極的に嫌う人はあまりいない。みんな、ローカル線が好きなのだ。

しかし、ローカル線に乗るには多少の時間的余裕が必要なので、時間を作ってまでローカル線に乗ろうという人は、決して多いとは言えない。現地での足を考えて車で旅する人も多い。沿線に暮らす人たちも、利用者は学生とお年寄りのみで、みんな車移動で鉄道にはあまり乗らない。しかし、鉄道がなくなるとなれば淋しい感情を抱く。

「乗らないけど残っていて欲しい」「鉄道のある『風景』が好き」それが本音なのだ。

ならば切符を購入してみたらどうか。その日の日付が入った切符は旅の記念になり、鉄道好きな友人へのちょっとしたお土産にもなる。記念切符の類ならなおさらだ。「乗る時間はないけど記念に切符だけ買います」などと駅員さんに話したら、それをきっかけに会話も弾むかもしれない。鉄道は残したいけど忙しくて乗れないという地元の人であれば、自治会費や募金のように、1世帯あたり月1枚、180円区間分切符を買う、というようなことをしても面白い。もちろん強制ではなく、あくまで任意で。

「鉄道は乗るより眺めるもの」「鉄道鑑賞券としての切符」そんな考え方が当たり前になっている鉄道や地域があったら面白い。それは「花に水をやる」心境とどこか似ている。季節の風に彩られ、まるで自然現象のような表情を見せる鉄道風景。そんなふうに“咲いた”鉄道を、これからもずっと眺めていたい、だから、水をあげるかわりに切符を買う、そんな考え方があっていい。

鉄道を旅し、描き、切符を買っては配りながら、そんなことを考えている。移動手段への対価としての切符、乗車を楽しむための切符、コレクション目的の切符、そこへ更に、「鑑賞を楽しむための切符」と、「鉄道への感謝の切符」を加えたい。

思い思いの楽しみから買われた一枚一枚の切符が、鉄道がこれからもずっと“咲きつづける”ための大きな力となることを、そして、今も途切れたままの鉄道の、次の一本の枕木に生まれ変わる日を、願ってやまない。